

会話パートナープログラムの現状と課題 —2009年度の運営状況から—

松本久美子

キーワード：留学生、日本人学生、会話パートナー、交流、プログラム運営

はじめに

長崎大学では留学生の支援を主たる目的とした「チューター制度」に加え、留学生と日本人学生の交流による相互理解を目的とした「留学生と日本人学生のための会話パートナープログラム」（以下、会話パートナープログラムと略す）が実施されている。会話パートナープログラムは1998年4月に留学生センター教員によって開設され、丸12年が経過した。この間、留学生数も約200名から378名（2010年2月現在）と約2倍近く増加しており、留学生受け入れ状況の変化や学生のニーズ等に対応して、会話パートナープログラムの目的や内容も順次変化し、発展してきた。

本稿では2009年度の運営状況から、現在の会話パートナープログラムの傾向と問題点を明らかにするとともに、今後の課題について若干の考察を加える。

1. 2009年度の運営状況

1-1. 登録者数とマッチング数

2009年度の会話パートナープログラム登録者数とマッチング数を表1に示す。

表1 2009年度登録者数とマッチング数

2009年度	登録者数	留学生	日本人学生	マッチング数
春 期	52名	26名	26名	26組
秋 期	97名	51名	46名	43組
合 計	149名	77名	72名	69組

まず、2009年度の登録者数であるが、表1に示されているように、149名中、春期（4月から9月）は52名、秋期（10月から3月）は97名で、秋期が春期の約2倍になっている。ここ5年ぐらゐの間に長崎大学で10月入学の留学プログラムが3つ立ち上がったため¹、受け入れ留学生の数が春期より秋期の方が多くなっており、このことが会話パートナープログラムの登録者数にも反映していると考えられる。

次にマッチングであるが、会話パートナーのマッチングは原則として1対1で行っている。留学生の会話パートナーを希望する日本人学生が、留学生との活動が初めてで1対1では自信がないという場合、もしくは、実習・就職活動等で忙しくなる時期があるので2人で対応したいというような場合については、留学生1人に対して日本人学生2人というケースもあるが、留学生2人に対して日本人学生1人というマッチングは行っていない。

2009年度春期は留学生と日本人学生の登録者数が同数で、26組（全組1：1）のマッチングを行い、登録者全員をマッチングすることができた。しかし、秋期は留学生の登録者51名に対して、日本人学生は46名と少なく、43組のマッチングにとどまった。43組中1組は留学生1名に対し日本人学生2名の組み合わせであったので、会話パートナーとして活動を開始したのは、日本人学生46名中44名、留学生は51名中43名ということになる。活動を開始できなかった日本人学生2名は韓国留学を考えているという理由で韓国人留学生との活動を強く望んでいたが、プログラム登録時期（11月下旬と12月初旬）が遅く、韓国からの留学生のマッチングは既に修了していたため、次期（2010年度）に持ち越すこととなった。また、日本人とのマッチングができなかった留学生8名についても同様に登録時期が12月から1月と遅かったこともあり、同様に次期（2010年度）に持ち越した。

1-2. 登録者の内訳

1-2-1. 登録留学生の内訳

表2に2009年度登録留学生の種別の内訳を示す。

表2 2009年度登録留学生の種別内訳

所 属	留学生の種別	2009年度 春 期	2009年度 秋 期	合計
学 部	正規学部生	2	0	2
	交換留学生（学部所属）	11	18	29
	英語による短期留学プログラム生	2	16	18
	日本語・日本文化プログラム生	2	7	9
合 計		17	41	58
大 学 院	正規大学院生	1	2	3
	研究生	4	5(1)*	9
	交換留学生（研究科所属）	4	3	7
合 計		9	10	19
総 計		26	51	77

*（ ）内は大学院入学前の日本語予備教育に在籍する留学生

表2では登録留学生の傾向がわかるように、「特別聴講学生」「特別研究学生」というような用語は用いず、以下のような分類にした。

<学部レベル>

正規学部生：長崎大学の学位（学士号）取得を目的として入学した留学生で、4月入学。

交換留学生（学部所属）：協定校からの交換留学生で留学期間は半年もしくは1年。日本語のレベルは主として上級レベル。特定のプログラムに所属するのではなく、自分の専門、もしくはそれに近い学部に所属し、その学部の専門科目を日本人学生とともに受講しながら、上級レベルの日本語クラスも履修している留学生。来日時期は4月と10月。

英語による短期留学プログラム生：いわゆる短プロと呼ばれるプログラムに所属する協定校からの交換留学生。プログラム開始時期は10月で、留学期間は1年。

20名中、約3分の2が初級レベル。

日本語・日本文化プログラム生：協定校で日本語・日本文化を専攻している学生を対象とした留学生センターのプログラム²に所属し、センターが提供する日本語と日本文化・日本研究に関する科目を履修する留学

生。プログラム開始時期は10月で、留学期間は1年。

<大学院レベル>

正規大学院生：長崎大学の学位（修士号・博士号）取得を目的としている留学生。

研究生：主に大学院に入学するために、研究室に通いながら受験準備をしている留学生。

（国費留学生で大学院入学前の日本語予備教育コースに在籍している留学生もここに含めた。）

交換留学生（研究科所属）：協定校からの交換留学生で、留学期間は3月から1年。

長崎大学の留学生数は年々増加しているが、特にここ数年増加が目立つのは協定校からの交換留学生（学部3年生もしくは4年生）である。交換留学生にも長崎大学在籍中チューターが配置されるが、一般的に交換留学生の場合、正規学部留学生に比べると金銭的にも時間的にも余裕がある者が多く、限られた留学期間中にできるだけ多くの体験をし、日本語も上達したいと望む者が多い。そのため、その大部分が、来日してすぐ会話パートナープログラムに登録するようになってきている。³

表2に示される通り、2009年度の学部レベルでの交換留学生（交換留学生：学部所属及び短プロ生）の割合は、約84%（春期：約76%、秋期：約83%）にも上る。大学院レベルも含めた全体に占める割合を見ても約61%で、現在の会話パートナープログラムの中心は学部の交換留学生となっていることがわかる。一方、大学院の場合、研究生の割合が一番高く、その次が交換留学生であるが、数値的には両者にほとんど違いは見られない。また、登録者総数も学部の約3分の1と少ない。この数値は、大学院生の場合、正規大学院生であっても交換留学生であっても、留学の目的が研究にあること、またその研究が忙しく、学部留学生と比べると自由に活動できる時間がかなり限られていることを示していると思われる。

会話パートナープログラム開設当初はプログラムの中心は大学院入学前の日本語予備教育生（研修生）であった。当時は、日本語予備教育期間は留学生センターに所属し、研修コースで日本語の学習に集中することになっており、日本語の学習と研究を並行して行う者はほとんど見られなかった。しか

し、現在では午前中は日本語、午後は研究室という学生がほとんどである。また、正規の予備教育生（大使館推薦国費留学生）の数自体も減少している。

1-2-2. 登録日本人学生の内訳

表3に2009年度に会話パートナープログラムに登録した日本人学生の学部・学年別の内訳を示す。

表3 登録日本人学生の学部・学年別内訳

2009年度 春期・秋期																		
学部	教育		環境		水産		工		医		歯		薬		経済		合計	
期	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋		
学部生	1	1	11	1			1			1				1	1	1	1	19
	2		12	1				4									2	19
	3	3	5				1			5							1	15
	4	1	4			1				4				4		1	2	17
合計	5	32	2	0	1	2	4	0	10	0	0	0	5	1	2	6	29	41
総計	37		2		3		4		10		0		6		8		70	
大学院							1		1									2

表3に示されているように、日本人学生の場合を見ても、大学院生の登録は70名中2名のみで、登録学生のほとんどは学部生である。長崎大学は8学部中、文系の学部は教育学部と経済学部の2学部のみで、理系中心の大学である⁴。大学院生は研究・実験に忙しく、時間的に余裕がない者が多いことに加え、同じ研究室の留学生のチューターとして活動している者も多い。一方、学部学生の場合、長崎大学ではチューターとして活動できるのは原則として3年生以上であるが、会話パートナープログラムについては学年に関係なく誰でも参加できることになっているため、1年次から参加する学生も多い。

2009年度学部別の登録者数をみると、教育学部が約54%と最も多く、秋期に関しては全体の約80%を教育学部の学生が占めている。以前から教育学部の登録者数は比較的多かったのだが、2009年度の後期に関しては、日本人学生募集に関して教育学部教員（1名）の協力を得られたため、同学部所属の学生が多数を占める結果となった。

また、学年別では、2009年度の場合、1年生と2年生の登録者数が同数で、学部生全体に占める割合は約54パーセント、最も登録者数の多い教育学部を

見ると、1・2年生が72%、3・4年生が28%となっており、1・2年生の登録者数が多いことが分かる。1・2年次は実習や就職活動もまだ始まっておらず、他の学年に比べ余裕があり、活動しやすい状況にあることもあって、例年1・2年生の登録者数が多い傾向にある。次に登録者数の多いのは医学部であるが、10名中1年生は1名のみで、後は3・4年次の学生となっている。これは医学部保健学科の3年生で留学生との交流活動に非常に意欲的な学生がおり、同学科の3・4年次の学生を積極的に勧誘したことによる。

会話パートナープログラムの日本人学生に対する募集方法は、各学部及び全学の掲示板に募集ポスターを掲示することで行っている。しかし、ポスターを見てプログラムの登録に訪れる学生は非常に限られており、既に会話パートナーとして活動している学生や登録に来た学生に友人・知人を勧誘するように頼むことで（いわゆる口コミで）人数を確保しているのが現状である。そのため、会話パートナーとしての活動に意義や楽しさを見出し、積極的に本プログラムを広めようとしてくれる学生が所属している学部の登録者数が必然的に多くなる傾向にある。

1-3. 登録時期

2009年度会話パートナープログラム参加希望者の登録時期を表4及び表5に示す。

表4 2009年度春期：会話パートナープログラム参加希望者の登録時期

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計
留学生	15	8	2	0	1	0(5)*	26
日本人学生	8	12	2	0	3	1	26
合計	23	20	4	0	3	1	52

* () 内の5名は、実際は9月に登録しているが、マッチングが10月以降になったため、秋期の登録者としてカウントしている。

表5 2009年度秋期：会話パートナープログラム参加希望者の登録時期

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
留 学 生	28	14	6	3	0	0	51
日本人学生	14	25	7	0	0	0	46
合 計	42	39	13	3	0	0	97

表4・表5に示す通り、2009年度については会話パートナープログラム参加希望者の登録時期は、留学生・日本人学生とも学期開始後の2カ月に集中している。交換留学生の場合、来日前に前年度に留学した先輩から会話パートナープログラムについて聞いている学生が多く、来日してすぐ筆者の研究室に登録に訪れる者も少なくない。これに対して日本人学生の場合、10月初めに各学部及び全学教育の掲示板に掲示する募集広告を見て自ら積極的に登録に来る学生は稀であり、プログラム運営者（筆者）が留学生の登録状況を見ながら日本人学生の勧誘活動を継続して行っているのが現状である。学期開始前に日本人学生に対する広報活動をし、登録者をストックしておくという方法も考えられるが、これまでの経験から、日本人学生に対しては登録後すぐに留学生とのマッチングを行うことが重要なポイントであることがわかっている。特に1・2年生は登録して1～2週間も過ぎるとサークル活動やアルバイトを開始しているケースが多く、マッチングのための電話連絡をした時にはすでに会話パートナーとして活動する時間がなくなっている（もしくは熱が冷めてしまっている）場合が多々ある。

2. 問題点と課題

以上、2009年度の運営状況（登録者数・登録者の内訳等）から現在の会話パートナープログラムの現状を述べてきたが、ここではそこから見えてきた問題点を項目別に整理し、今後の課題とその解決策について考える。

2-1. 日本人学生の募集方法

受け入れ留学生数は年々伸びており、2010年度秋期には400名を超える予測される。特に10月来日の留学生が増加しており、会話パートナープログラムの登録者数にもそれが反映されている。しかし、これに対して日本人学生

の登録者数をなかなか増やすことができない現状にある。プログラムの運営は開設当初から留学生センターの教員1名（筆者）のみで行っており、これ以上留学生の登録者数が増えるとそれに見合う日本人学生数を確保できなくなる恐れがある。留学生センター教員は基本的に日本人学生に対する教育を担当しておらず、日本人学生に対して直接働きかける場を持っていない。加えて、長崎大学は理系中心の大学であり、文学部・社会学部・国際関係学部といったような学部を持たないため、比較的時間に余裕があり、国際交流に興味を示すような学生が多いターゲットとなる学部がない。文系2学部のうち、経済学部は留学生センターのあるメインキャンパスから離れた場所にあるため、主としてメインキャンパスにいる留学生とのマッチングは難しい。また、教育学部は教員養成のための学部であり、3・4年生は実習も多く時間的に余裕のない者が多い。2009年度秋期のように、学部所属の教員で特別に本プログラムに関心を払い、支援を申し出てくれるような協力者が得られない限り、かなり厳しい状況が予測される。これまでも、第2外国語（中国語・韓国語）担当教員に、クラスでの会話パートナープログラムの紹介を依頼したこともあるが、残念なことにほとんど功を奏しなかった。現在、最も効果的な勧誘方法は会話パートナーとして既に活動している学生のロコミであり、友人に対する直接的な勧誘である。⁵

2010年度秋期に向けて考えられる対策としては、①プログラム運営者がより積極的に学部の先生方とのネットワークを作っていく努力をすること、②学期末に登録名簿を整理し、留学期間を終え帰国した留学生のパートナーをしていた日本人学生にメールを送付し、活動の継続を呼びかけること、③積極的に活動している日本人学生に広報活動への協力を更に呼びかけること、が挙げられる。

2-2. 登録方法と登録期間

登録方法については、登録希望者はプログラム担当者の研究室に来室し、直接面談の上、登録カードに必要事項を記入するという方式を取っている。また、登録期間についても一定の期間を設けず、随時受け付けており、この2点については会話パートナープログラム開設当初から現在まで変更を行っていない。

登録方法については、①登録時にプログラムの目的をより良く理解しても

らい、留学生との活動が両者にとって実りあるものとする、②適切なマッチングを行う、③活動するうえで問題が生じ、担当者の介入が必要になった場合、「顔の見える」関係を作っておく、という理由で今後もこの方式を継続する予定である。しかし、登録者数が多くなるにつれ、プログラム運営者にとって登録作業とマッチングに取られる時間はかなりの負担となっており、登録期間については今後見直す必要があるのではないかと考えている。

現在、検討中の案としては、春期は4月から5月、秋期は10月から11月の2ヶ月間を登録期間とし、基本的にその期間以外の登録を認めないというものである。(2010年度秋期から実施予定) 2009年度の実績を見ても、春期6月以降及び秋期12月以降に登録する学生は少なく、また実際に、6月以降、もしくは12月以降に登録したとしても、パートナーを探し、適切なマッチングを行うのは難しい状況にある。広報活動も同時に強化しながら、2011年度をめどに、留学生については、春期は4月から5月のゴールデンウィーク明けまで、秋期は10月から11月の第1週までの約1ヶ月間を登録期間とし、春期は5月末、秋期は11月末までに全てのマッチングを終えることができるようにしたいと考えている。

2-3. プログラム参加者に対する管理システム

会話パートナープログラムでは、チューター制度のようにプログラム運営者に対する定期的な活動報告の義務を課していない。何か問題が生じたときには随時対応するようにしているが、マッチングが終了すれば、それからの活動は基本的にパートナー同士が話し合って自由に決めて行くことになる。両者の満足度に関わりが生じず、交流活動が継続して行われるように、①少なくとも週1回(ランチタイムと一緒に食事をするだけでなく)、1時間～2時間は会話パートナーとの活動の時間を持つこと、②何らかの理由で会話パートナーとしての活動を継続することが難しくなった場合(もしくは休止する場合は、その旨、相手に連絡するとともにプログラム運営者にも連絡すること、の2点について、参加希望者の理解と同意を得てからプログラムに登録してもらうようにしている。しかし、前述したように、現在の会話パートナープログラムの中心は交換留学生(学部3・4年生)で、時間的に余裕もあり、また、会話パートナープログラムに対する期待度もかなり高く、できるだけ頻繁に日本人学生のパートナーと活動したいと考えている者が多い。

これに対して、日本人学生の場合、会話パートナーをする以前に留学生との交流経験がない者が多く、週に1度昼食を一緒にしただけで留学生と有意義な交流できていると考える者が散見される。こうした場合、留学生と日本人学生のプログラムに対する満足度の差が大きくなってしまうことになる。また、それがパートナーの交代希望やパートナー活動の自然消滅につながるケースも出てきている。

こうした問題に対処するために、今後はプログラム登録者の活動の自由を妨げない程度（1か月、もしくは2カ月に1回）に、プログラム運営者からプログラム登録者全員に向けて順調に交流活動が行われているかどうか確認のメールを送信することを検討する必要があると思われる。現在、プログラム運営者による学期ごとのアンケート調査の実施が困難になってきている⁶。アンケート調査の定期的な実施に加え、よりよいプログラム運営のためには活動を開始して1カ月ぐらいの時点でパートナー活動の個々の状況を知る必要があると考えている。

2-4. 会話パートナー・ハンドブック

会話パートナーとして活動する日本人学生用には『会話パートナー・ハンドブック』を作成し、2度の改訂を行っているが、留学生用にはハンドブックを作成していない。これは両者の交流において、これまでの筆者の経験（指導相談業務や留学生と日本人学生の合同クラスの実践等）から、日本人学生の方により異文化間交流における知識が必要であると考えたからである。現在、『会話パートナー・ハンドブック』の在庫がなくなってきており、2009年度は登録者全員に配布できなくなる恐れがあったために配布を控えている。

プログラムの中心も大学院入学前の予備教育生と研究生から学部の交換留学生にシフトしており、現在の状況に即したハンドブックの改訂を、プログラム参加学生の声を聞きながら、できるだけ早い時期に行わなければならないだろう。

おわりに

筆者は会話パートナープログラムの運営者であると同時に、チューター制度も担当している。チューター制度についても、担当してきた12年間の間に、運営方法の見直しやチューターガイドブックの改訂等、改善を重ねてきてお

り⁷、チューター制度と会話パートナープログラムの差別化を図り、それぞれの特色を生かした運営を行いたいと努力してきた。近年、1・2年次に留学生の会話パートナーとして活動した日本人学生が3年次になってからチューターとして留学生を支援するケースも増えてきており、留学生との交流経験のある学生がチューターとなるのは非常に望ましいことであると考えている。しかし、現在、学生の就職活動が3年次から開始されていること、留学生が増加していること等のために、留学生のチューターとなる日本人学生（原則として3年次以上）の確保が難しくなってきたり、実際に2年生であっても、後期からであればチューターとして活動している学生が出てきている。大学の国際化の名のもとに今後も受け入れ留学生数は増加していくであろうし、その中でチューター制度の予算確保が難しくなることも考えられる。今後、チューター制度と会話パートナープログラム、それぞれのシステムを大きく見直す必要が出てくるかもしれない。

いずれにせよ、大学の実質的な国際化を考えるとき、留学生と日本人学生の交流促進の必要性はますます高まっていくだろう。会話パートナープログラムは、「留学生と日本人学生に個人と個人の継続的な異文化接触の場を提供し、日本語を基本的な媒介言語とする活動を通して実践的な異文化コミュニケーション能力を養成し、両者の相互理解を促進すること」を目的としてきた。大学や留学生をめぐる状況は時々刻々と変化していくだろうが、今後も会話パートナープログラムを大学の国際化を推進するための方策の一つとして位置付け、留学生と日本人学生の交流促進のためのプログラムとして継続・発展させていきたいと考えている。

- ¹ 「長崎大学短期留学プログラム」が2004年10月に、「交換留学生日本語プログラム」が2005年10月に、「上級日本語・日本文化コース」が2007年10月に開始された。
- ² 長崎大学留学生センターには、協定校で日本語・日本文化を専攻する学生を対象とするプログラムが2つある。1つは「交換留学生日本語プログラム」で、対象留学生の来日時の日本語レベルは中級。もう1つは「上級日本語・日本文化コース」で、上級レベルの日本語能力を有する者を対象とする有料のコースである。

- 3 会話パートナープログラムは、長崎大学に在籍する留学生全員を対象としており、チューターが配置されている留学生についてもプログラムに登録することができる。
- 4 環境科学部は文理融合の学部である。
- 5 2009年度秋期に協力いただいた先生も、教室で全員に呼びかけるだけでなく、学生一人一人に直接話をするという方法を取ったとのことである。
- 6 国立大学が法人化する以前は、教員の通常の研究費を使用して学生アルバイトを雇うことが可能であり、実際に個人の研究費から会話パートナープログラムの補助者を雇用していたのだが、法人化後はそれが難しくなった。これに加え、登録者数も増え、2009年度についてはアンケート調査が実施できていない。
- 7 チューター制度の改善については、松本（2003）に詳しい。

<参考文献>

- 松本久美子（2001）「会話パートナープログラム—留学生と日本人学生の相互理解に向けて」『広島大学留学生センター紀要』第11号 pp.79-93
- 松本久美子（2003）「留学生支援とチューター制度の改善」『長崎大学留学生センター紀要』第11号 pp.75-90
- 松本久美子（2004）「会話パートナー・ハンドブックの作成と改訂—留学生と日本人学生の交流・異文化理解促進の一環として—」『長崎大学留学生センター紀要』第12号 pp.27-40
- 松本久美子（2004）『会話パートナー・ハンドブックVer. 3』長崎大学留学生センター
- 松本久美子（2009）「「留学生と日本人学生のための会話パートナープログラム」の10年を振り返って」『留学生交流・指導研究』Vol.11 pp.21-22
- 松本久美子（2010）『チューター・ガイドブッカー制度の概要とチューターの心得（第13版）』長崎大学留学生センター